

ライデンにおける東アジア研究の由来と発展、 1830-1945

W. J. ボート*

ライデンの東亜学¹⁾の伝統はいうまでもなく、シーボルト (Ph. F. von Siebold, 1796-1866) から始まる。ただし、この場合、実物のシーボルトと「商品名」としてのシーボルトを区別しなければならない。先駆者や共鳴者や協力者がいたのに、皆シーボルトの陰に潜んでしまうのは妥当ではない。なお、シーボルト以後の諸先生もあって伝統はシーボルトから始まったとしてもそれを継続して展開させてきた彼らも忘れてはならない。だから、この講演ではシーボルト以外にホフマン (J. J. Hoffmann, 1805-1878) とデ・グロート (J. J. M. de Groot, 1854-1921) とデ・フィッセル (M. W. de Visser, 1875-1930) の三人を取りあげることにした²⁾。

シーボルトが1823年から1829年まで日本に滞在したが、その間に、蘭印軍の軍医として蘭印軍の規定通りに任地にある植物、金石などを調査して、国益のありそうなものを集めて報告を納めるのだった。しかし、並々の軍医と違って若きシーボルトがいかにも熱心にその資源調査に没頭した。この「世界一興味深い国」の日本に着いて間もないときから、日本の物品を総合的、しかも体系的に収集して、それに基づいて日本の幅広い研究をやり遂げたいという野心に燃えていた³⁾。模範になっていたのはやはりドイツのフンボルト兄弟だった。シーボルトが

* ライデン大学日本学教授

- 1) この論文で一貫して「東亜学」という用語をもって、ライデンにおける中国、日本、朝鮮の東アジア三カ国の研究を指す。「東洋学」でも良かったが、「東洋」はどこまで続くか、そして、日本が果たして入っているかどうか、という点で曖昧な表現なので、今度使わないことにした。
- 2) この講演を準備するにあたって次に三つの論文に多く頼った。J. L. Blussé, “Of Hewers of Wood and Drawers of Water: Leiden University’s Early Sinologists (1853-1911),” W. Otterspeer, ed., *Leiden Oriental Connections 1850-1940* (Leiden: Brill, 1989), pp. 317-353; F. Vos., “Mihatenu yume - An unfinished dream: Japanese Studies until 1940,” *ibid.*, pp. 354-377; W. R. van Gulik, “Von Siebold and his Japanese collection in Leiden”, *ibid.*, pp. 378-391.興味がある読者は是非ともこの三つの論文も参照すべきだ。なお、以下の拙論でも共通のテーマを扱ったので、あるいは参考になる。Boot, W. J., 「オランダにおける日本学の現在と将来」、栗原福也他編、『江戸時代の日本とオランダ。日蘭交流400年記念 シンポジウム報告』(東京：洋学史学会、2001), pp. 1-13; 同、「ヨーロッパにおける日本漢文学研究の現状と課題」、『世界における日本漢文学研究の現状と課題』(東京：二松学舎大学21世紀COEプログラム、2005), pp. 29-60.
- 3) Van Gulik、前掲論文、pp. 379-380を参照。シーボルトが叔父にこの計画を述べる手紙が引用されている。

1842年に出した『日本の版本写本目録』⁴⁾の口絵は日本風の墓の絵があってその下にラテン語で「Wilhelm von Humboldtの霊に捧ぐ」と書いてあることはこれを端的に示すものだ。

シーボルトがそのコレクションを集める直前または同時に、外にも出島にいたオランダ人が日本の物品を集めていた。名前はコック・ブロムホフ (J. Cock Blomhoff, 1779-1853; 1817-1823の間カピタンとして日本に滞在した) とオウエルメール・フィシエル (J. F. van Overmeer Fisscher, 1800-1848; 1820-1829の間日本に滞在した) だった。二人とも、そのコレクションをオランダへ持って帰って、それを国、とりもなおさず王様に売った。なお、蒐集の情熱はコック・ブロムホフから始まったわけではなく、カピタンとしての前任者のチチング (I. Titsingh, 1745-1812) とヅッフ (H. Doeff, 1777-1835) も大きいコレクションを集めた。ヅッフのコレクションを乗せた船が遭難したから失われて、蒐集の意図もコレクションの内容も分からないが、チチングは後のシーボルトと同じ意図で、つまり、学問的研究の資料として、物と本を集めたことは確かだ。レクイン博士の努力のおかげに、チチングの死後ナポレオン帝国の崩壊の渦巻きの中でばらばらになったコレクションの面影を回復してその内容が分かるようになった⁵⁾。

コック・ブロムホフとオウエルメール・フィシエルとシーボルトのそれぞれのコレクションは全部オランダ国家に購われハーグとライデンで保管されていた。こういう形で、世界的にユニークな研究資料がここに集まってしまったわけだ。今ライデンに行くと、日本のコレクションは市内にある民族学博物館、自然科学博物館、植物標本保存館、そして、大学の付属図書館に保存されている。筆者に物品や動植物標本の数字が分からないので、それを省略して、写本と各種の印刷物のみに限ると、約2千点に昇る⁶⁾。シーボルトの上述の『日本の版本写本目録』には603点しか載っていないので、1842年以後も蒐集活躍が続いたことは分かるが、なお、この603点の中にコック・ブロムホフのコレクションより29点、オウエルメール・フィシエルの持ち帰った117点の写本や版本の内から60点も組み込まれている。というわけで、はや合点してライデンの博物館と大学にある資料は全部「シーボルト・コレクション」だと思い込んだのは間違いだ。シーボルト自身は写本と版本は525点集めたので、他の2人よりずっと多いが、彼等の貢献も見逃してはならない⁷⁾。

シーボルトの助手のホフマンはある時、「オランダのおいてオランダのために働きたい」と言ったが、彼のように日本の研究を志した人物なら当時の世の中にオランダ (ライデン) 以外

4) Ph. F. von Siebold, *Catalogus librorum ac manuscriptorum japonicorum*, Leiden, 1845 (復刻 Tokyo, 1988: 『シーボルト蒐集図書目録』)。

5) Lequin, Frank, *À la recherche du Cabinet Titsingh: its history, contents and dispersal: catalogue raisonné of the collection of the founder of European Japanology*, Alphen a/d Rijn: Canaletto, 2003

6) H. Kerlen, *Catalogue of Pre-Meiji Japanese Books and Maps in Public Collections in the Netherlands*, Amsterdam: J. C. Gieben, 1996を参照。

7) Siebold, *Catalogus*の序文 (シーボルト著) に依る。

の場所はなかった。パリではチチングのコレクションの断片と17世紀初頭のジェズ会の文法書を活かして何とかがんばっていたが、資料はないと言っていいほど少なかった。ロドリゲスの『日本語小文典』の翻訳以外に、この研究の業績として挙げられるのはチチングが始めた、クラブロート (J. Klaproth, 1783-1835) が仕上げた『日本王代一覽』(7巻; 林鶯峰著; 1652自跋) の翻訳ぐらいだ⁸⁾。1843年にシーボルトは書籍を34点パリの王立図書館に寄付したことで、資料は少し増えた。もう一つ、日本の研究の萌芽が出た所はウィーンだが、これはあくまでもシーボルトが1836年に朝廷図書館に売った、約60点の書籍⁹⁾ とフィツマイアー (A. Pfizmaier, 1808-1887) の独学に依る。資料蒐集の面においてはパリーもウィーンもライデンに遠く及ばなかった。原則としてオランダからの便りを待っていたわけだ。

さて、資料はあってもそれを利用することができる人がいなければどうにもならない。シーボルトはこの問題を見抜いて帰途のバタビアで中国人の郭成章 (1802-約1845) を雇ってオランダへ連れてきた。しかし、本当に資料を活かしたのはシーボルトが到着直後のアントウエルペン市で出会ったホフマンだった。偶然な出会いで話すきっかけになったのはホフマンもシーボルトも同じウルツブルグ (Würzburg) 市の出身者だった。当時ちょうど25歳のホフマンはウルツブルグ大学で古典語を勉強したらしいが、博士号も獲らずに歌手になって歌手としてたまたまアントウエルペンに逗留していたわけだ。シーボルトに助手になるように招待されたことはホフマンにとっては「待ってました」という機会だったかのように、躊躇せずライデンについて行ったのだ。

ホフマンが日本語を覚える経路は複雑だった。まず、郭成章の指導が受けられるように、マラヤ語を習わなければならなかった。その後、中国語を習い、そして、日本人が中国語を習うために作った参考書を逆の方向に使うって日本語を習い始めた。修行の7年目に、初論文を表す。榊についての論文で「中国と日本の本草学書による」と題名に断っておくが、どんな気持ちでこう書いたのか、測られよう¹⁰⁾。その後、研究を続けながら定期的にシーボルトの出しっつである『日本』に翻訳や論文を載せる。

1846年が分岐点だった。ホフマンがロンドンで新しく設立される中国語の教授席に薦められ

8) J. Klaproth, *Nipon O Dai Itsi Ran ou annales des Empereurs du Japon, traduites par M. Isaac Titsingh, avec l'aide de plusieurs interprètes attachés au comptoir hollandais de Nangasaki; ouvrage revu, complété et corrigé ...*, Paris/London, 1834.

9) Effert, R. A. H. D., *Volkenkundig Verzamelen. Het Koninklijk Kabinet van Zeldzaamheden en Het Rijks Ethnographisch Museum, 1816-1883* (Ph. D. dissertation, Leiden, 27-2-2003), p. 136, notes 124 and 125.

10) *Die Angaben aus Schinesischen and Japanische Naturgeschichten von dem Illicium religiosum (dem Mang tshao der Schienesen, Sikimi no ki der Japaner) und dem davon verschiedenen Sternanis des Handels* (1837)

る運びとなったので、朋友がオランダの植民地大臣に訴えて、何とかしてこの貴重な学者をオランダに残るよう、努力してくれるように呼びかけた。結果として、ホフマンを植民地省所属中国語並びに日本語の翻訳官に任命された。朋友の介入が成功した。これでホフマンは収入も安定すれば、シーボルトからも一歩離れることが可能になった。『日本』の編集への協力も事実上、これで打ち切ったようだ。1846年以降、寄せた論文は唯一つ、「仏像図鑑」(*Das Buddha-Pantheon*, 1851)のみだが、これだけ遅れたのは図版ができあがるまで時間が掛かったからだったらしい。翻訳官を勤めながら日本と中国の研究を続けた。学者としても認められてきた。1840年にすでにドイツの或る大学から名誉博士号を授けられるし、1849年にRoyal Institute (王立学術文学芸術院)の一員に任命される。

1855年に更にライデン大学で特別教授に任命される。給料は相変わらず植民地省から出て、必要に応じて同省のため翻訳通訳もせねばならず、教授会で発言権はない、等々の条件があったから、普通の教授ではなかったが、肩書きは日本語中国語教授で給料も教授なみだった。主な任務は植民地省のために中国語の通訳官を教育することだ。が、それ以外の学生が日本語か中国語の指導が受けなければ教えてよい。彼はその後12人程の学生を育成した。教育の外に執筆と(日本語、中国語の)印刷と日本人の来客の接待で忙しかった。来客は1862年の夏、オランダの訪れた文久二年遣欧使節と、1863年から1867年まで滞在していた、幕府が派遣した留学生だ¹¹⁾。ホフマンはこの留学生にオランダ語を教えるために講師を手配したりして一般的に面倒を見ていたらしいが、とりわけ親しく付き合ったのは西周と津田真道だった。1864年に『大学』のテキストを出すと、西と津田両人の序文が付いている¹²⁾。本書は翻訳が付いておらず、ホフマンが前書きで断るように日本語の文語体の教科書として使うつもりだった。

外に文法と字引の編纂に励んだ。一番目の文法書が1857年に表われた『日本語の文法の試み』¹³⁾だった。この本の元の著者はホフマンではなく、ドンケル・クルチュス(J. H. Donker Curtius, 1813-1879)だった。彼は蘭印の総督府から派遣されて1852年から1860年まで、始めは商館長として、開国以後はcommissaris(主任)として長崎で勤務した。暇の時間に長崎の方言を研究して文法を仕上げた。この90枚ぐらいの原稿を大臣に送るとすかさずホフマンに廻され、因みに、大臣に編集して出版するように命令された。ホフマンはしたくなかった。「自分の文法は殆どできあがっているからそれを出す間際だったのに、人のものを出させられるなんて、」と、文句を言ったが、やはり大臣に逆らうことはできなかった。所詮、ドンケル・クルチュスの文章はローマ字使いを変えただけで、一応残すことにしたが、多量の注釈やコメン

11) 文久遣欧使節団ならびに幕末留学生に付いて宮永孝の一連の本と論文が詳しい。

12) *The GRAND STUDY (TA HIO or DAI GAKU), Pt. I. The Chinese text with an interlineary Japanese version; Pt. II, Reading of the Japanese Text [in Roman characters]*, ed. Dr. J. Hoffmann, Leiden: E. J. Brill, 1864.

13) J. H. Donker Curtius, *Proeve eener Japansche spraakkunst; toegelicht, verbeterd en met uitgebreide bijvoegselen vermeerderd door J. Hoffmann*, Leyden: Sythoff, 1857 (フランス語訳は1861年に出版)

トを付けて自分の学識を盛り込んだ。結果として生まれたのは実に希有な本だが、新鮮な日本語の文法として注目されたし、4年後フランス語訳が表われた。ホフマン自身の文法がそれから10年経ってやっとできあがった。1867年から1877年までの間にオランダ語、英語、ドイツ語版で続々と表われるのであった¹⁴⁾。

日蘭辞典も準備した。その完全な原稿が写本のままライデン大学の付属図書館の書庫に眠っている。ホフマンが亡くなってから、国に助成金を得て弟子(日本語専門)のセリュリエ(L. Serrurier, 1846-1901)がそれを出す予定だったが、セリュリエが途中で放っておいたので3巻しか日の目を見ていない¹⁵⁾。

ホフマンの活躍の中で評価すべき点は幾つかある。一つは本人の真の関心は日本だったのに、日本のことを東アジアの文脈の中で捉えて研究する態度だった。中国語がよくできたし、よく教えた。朝鮮語ができたわけではないが、ハンゲルは読めたし、『日本』のなかでそれを紹介する。同じ『日本』で日中、日鮮関係の歴史などを取りあげる論文を載せ、その中で『朝鮮物語』のような、きっと難儀だった資料も扱っている。もう一つ評価すべき点は、彼にとって言語が基礎であったことだ。自称して日本学者である彼は一生、中国語と日本語の研究に関心を持ち続けて、本や論文を見るとその造詣の深いことに恐れ入り、その情熱に圧迫される。しかし、論文は必ずしも言語だけに関するものではなかった。『日本』に寄せた論文は幅広く歴史、言語、宗教に触れるもので、『日本』以外には植物学や山繭や磁器の製造や暦や天地会(中国の秘密結社)について研究し、論文を著した。

ホフマンは彼の末年に使用されるようになった言葉で言うと、Japanologist(日本学者)だった。中国語を習わざるを得なかったことは、始めは偶然だったかも知れないが、一度覚えてしまったらとくとその重要性を認めて、中国語抜きに日本のことを研究できないということを悟った。なお、朝鮮語に対する関心を持ったことで、東アジア3国の共通性と関連性も十分に理解していたことが分かる。

ホフマンが亡くなる一年前の1877年に、一番古い弟子のスレーゲル(G. Schlegel, 1840-1903)が普通教授に任命され、就任講義の題名は「中国語の研究の重要性」だった。スレーゲルはライデンで中国語を勉強した上、1857年に植民地省に入省し、中国に派遣されて1858年から1862年まで廈門に留学した。廈門が選択されたのは福建省の方言が蘭印に住む中国人の間に一番広く使われていた方言だったからだ。それを現場で習ってから蘭印に戻って1872年まで通訳官として総督府の最高裁判所に勤めるようになった。研究を怠らず、1869年にドイツのイェナ大学から博士号をもらった。オランダに戻ってから、1873年よりホフマンに代わって中国語

14) Japansche Spraakleer, Leiden: Sijthoff, 1867. 英訳1867-1868、再版1876; ドイツ語訳1877。

15) J. J. Hoffmann, *Japansch-Nederlandsch woordenboek*, bewerkt en uitgegeven door L. Serrurier, Vols 1 & 2, Leiden: Brill, 1881; Vol. 3, Leiden: Brill, 1892.

の通訳官の育成を引き受けて、1875年に特別教授に任命され、そして、上述のごとく、1877年に普通教授になった。1875年に名作の『中国の天文学』¹⁶⁾を著したことで、ヨーロッパ中権威として認められた。特にパリの中国学者とつながりが深かった。ここから生まれたのは『通報』(T'oung Pao)という中国研究の専門雑誌だ。今も存続して、編集者は相変わらずパリとライデンの中国学教授だ。

ホフマンと同じようにスレーゲルも大かた、総督府のための通訳官を育成することが任務だった。その一人はデ・グロートだった¹⁷⁾。若い時からどうしても外国へ行きたがっていた彼は、2度海軍に応募したが、断られたので仕方がなく蘭印の総督府の官僚が教育される高等学校に入学した。最早、この学校をつまらないと思ってきたので、途中退学してライデン大学の中国語通訳官の育成課程に籍をうつした。通訳官は総督府では専門職なので高いポストには就かないと周りから注意されたが、「きちんとやればどの職でも名誉は汚さない」と答えたらしい。ライデンでの勉強を終えてからスレーゲルの留学以来決まってきたパターンを踏まえてデ・グロートもライデンのコースを終えてから1876から1878まで廈門に留学した。この二年間にたくさんフィールドワークをしてその後の研究の基礎となる資料を集めはじめたのだ。蘭印で通訳官の仕事をしながらか、研究を続けて、そして、休暇でオランダに戻っているときに1884年に、*Jaarlijkse Feesten en Gebruiken van de Emoy-Chineezen* (「廈門地方の中国人の年中行事」；第1巻1881、第2巻1883)を提出して、ドイツのLeipzig大学から博士号をもらった¹⁸⁾。

1886年から1890年に再び福建に赴く。今度の目的は中国人の宗教生活を社会科学的、文化人類学的な角度から研究することだった。純粋な研究プロジェクトで、調査員はデ・グロートただ一人だった。財源は総督府で、大義名分はこの研究が蘭印支配にとって貴重な知識をもたらす見込みがあるというものだったが、研究と調査ばかりの滞在にはならなかった。公の任務として福建の人夫が直接的に廈門からスマトラ島のコーヒー園等に行くことができるような組織を設立することだった。その時まではシンガポールで雇われるのは普通だったが、それはお金と手間がかかりすぎるので、農場の経営者は人夫を直接的に福建省から取り寄せられる制度に変えてほしかったので、デ・グロートが総督府の費用で福建に行くことを聞いたら、総督に頼んでこの任務を課させた。もう一つの、個人的に引き受けた仕事があったが、それはギメ

16) *L'uranographie chinoise ou preuves directes que l'astronomie est primitive et originaire de la Chine*, Leiden, 1875.

17) 他の教授と違ってデ・グロートだけは単行本の研究が存在する：Werblowsky, R. J. Z., *The Beaten Track of Science: The Life and Work of J. J. M. de Groot*, ed. H. Walravens, Wiesbaden: Harrasowitz, 2002.

18) この研究は1886年に著者の協力を得てフランス語に翻訳された。フランス語版の方が決定版と見なされている。題名は*Les fêtes annuellement célébrées à Emoui (Amoy). Étude concernant la religion populaire des chinois*, 2 vols, Paris: Ernest Leroux, 1886.

(Émile Guimet, 1836-1918)¹⁹⁾の博物館のために中国の神々の彫刻を集めることだった。ライデンの博物館長のセリュリエはこれを聞いたら契約違反だと憤慨して、植民地大臣にまでも告訴したが、却下された²⁰⁾。デ・グロートと仲が直ることはなかったが、それでも二度目の福建滞在の間に収集した物品と彫刻はリオンのギメ博物館だけに保存されているのではなく、一部はライデンの博物館に辿り着つて、今、保存されている²¹⁾。デ・グロートは博物館のコレクションを重視して、教授になってから「自分の施す教育に欠けてはならない支えとなっているもの」とさえ称えたことがある。1902-3年、博物館がライデンからアムステルダムへ移転されそうになっていたときに、それを阻止するために自分が当該有識者委員会の会長に任命されるように仕向けてそれを止めることに成功した²²⁾。

1891年にデ・グロートはライデン大学でインドネシアの民俗学教授に任命されたが、翌年著した研究は福建における長年のフィールドワークと文献の研究の産物である『中国の宗教制度』の第1巻だった。1910年までに全部で6巻を印刷するがそれでも未完結のままに終わった²³⁾。研究テーマである中国と責任を持つインドネシア研究と、一見して矛盾する二つを、どう調和させようか、その方針が就任講義の題名に伺える。師事したスレーゲルに題目を借りて、『政治と学問の両観点から見て、我が植民地のための中国に関する知識の重要性に付いて』²⁴⁾ということを論じた。スレーゲルが亡くなると、デ・グロートがその跡を継いで中国学教授に任命される(1904)。1911年にベルリンに移るが、その理由は学生クラブの新入生のいじめ問題で

19) ギメの事は Werblowsky, *Beaten Track*, pp.72-75が詳しい。デ・グロートとの協力については、同書, pp. 55-57, 59-63を参照。

20) セリュリエとの喧嘩について Werblowsky, *Beaten Track*, pp. 57-58, 64-66, 70-71を参照。「契約違反」の告訴について同書, p. 64を参照。

21) 正確に言うとも一回目の滞在のときに収集したものは博物館に寄付し、二回目の滞在のものは中間業者(Brill社の者)を通して博物館に売った。Werblowsky, *Beaten Track*, pp. 62-63.

22) Werblowsky, *Beaten Track*, p. 71.

23) J. J. M. de Groot, *The religious system of China: its ancient forms, evolution, history and present aspect, manners, customs and social institutions connected therewith*, Leyden: Brill, 1892. Book I: Disposal of the dead. Part I: Funeral rites. Part II: The ideas of resurrection

—, *The religious system of China: ...*, Leyden: Brill, 1894. Book I: Disposal of the dead. Part III: The grave (first half)

—, *The religious system of China: ...*, Leyden: Brill, 1897. Book I: Disposal of the dead. Part III: The grave (second half)

—, *The religious system of China: ...*, Leyden: Brill, 1901. Book II: On the soul and ancestral worship. Part I: The soul in philosophy and folk-conception

—, *The religious system of China: ...*, Leyden: Brill, 1907. Book II: On the soul and ancestral worship. Part II: Demonology. Part III: Sorcery

—, *The religious system of China: ...*, Leyden: Brill, 1910. - Book II: On the soul and ancestral worship. Part IV: The war against specters. Part V: The priesthood of animism.

24) J. J. M. de Groot, *Over het belang der kennis van China voor onze koloniën, uit een politiek en wetenschappelijk oogpunt*, Leiden, 1892.

論争を巻き起こしてライデンに居られなくなってしまったことと、ベルリン大学の約束する研究条件の両方があった。つまるところ、ベルリンでライデンよりは予算が多く、協力者などの点でも自分の要求を受け入れてもらえたとし、ドイツはインドネシアという植民地を持っていなかったから中国研究だけに集中することが可能だった。おあいにく、ベルリンに移ってから間もなく第一次世界大戦が始まって条件が急に悪化した。1921年にベルリンで亡くなる。

デ・グロートの代表作は『中国の宗教制度』だ。この長編の研究は幾つかの理由で評価すべきだ。(1) 全部中国の物品と資料と文献と、または、著者自身の観察に基づいていること。(2) “Religious System” (単数) で、中国の宗教生活を捉えようとする。道教、仏教、民間信仰を区別してどれか一つを論じるわけではなく、統一した「中国人の宗教」²⁵⁾があることを前提にして研究を進めている。ベルリン時代の主な研究である *Universismus* でも、副題は「中国の宗教と道徳、国家体制と学問との基礎」²⁶⁾ となっているように、中国文明の全体を一貫して中国を中国たらしめるものがあるという意見だった。デ・グロートにとってもこれは一種の閃きだった²⁷⁾。(3) フィールドワークで得たデータは五経までも遡る、古い文献と結びつけて論じること。オランダを発つ前に撮影の技術までも習ったのでカメラを利用しているような、本当に刷新なフィールドワークだったが、その結果を必ず、三千年の継続性を誇る中国文明の伝統に照らして分析するように努力し、現状を解明するに当たってこの過去を考慮しなければならない、という意見だった。すでに廈門の年中行事の研究では、エジプト、ギリシア、ローマの古代文明が全部滅びたのに、中国の文明だけは相変わらず存続していることを説いていたので、この問題意識は始めからあったことが分かる²⁸⁾。(4) 当時の比較文化人類学、Tylor, Mannhardt, Frazer, Langなどの研究方法と問題意識を中国研究に応用したこと。デ・グロートは「中国を語る」というような中国学者ではなかった。中国学が学問であるならば、普遍的な命題と方法が必要であることを確信していた。一貫して宗教を研究してきたことも、このような普遍性の要求と関連する。『中国の宗教制度』第1巻の序論で書くように：「大方の野蛮民族と開発途上の民族と同じように、中国でも人間の霊魂が一切の上位の存在の原型である。霊魂崇拜は、だから、その国の一切の宗教的現象の基である」²⁹⁾。そして、もっとも完結

25) デ・グロートはこの題名の本もある：*The religion of the Chinese*, New York, 1910.

26) *Universismus, die Grundlage der Religion und Ethik, des Staatswesens und der Wissenschaften Chinas*, Berlin, 1918. *Universismus* (「全体主義」とでも翻訳し得ようか) という概念を戦前から使っていた：*Religion in China. Universism: a key to the study of Taoism and Confucianism*, New York & London, 1912.

27) 1886年6月6日の条に日記に次のことを記す：「殆どの祭りを観察して記録を取る。間もなく、それらに一貫する糸を見つけたが、それから何でも明々白々になってきた。やっと仕事を体系的に進めることが可能になり、習慣風俗の大成のどの部分でも一つの全体の中に嵌っていることが分かった」。Werblowsky, *Beaten Track*, pp. 83-84を参照。

28) Werblowsky, *Beaten Track*, p. 78を参照。

29) “As in the case of many, if not of most barbarous and semi-civilized peoples, the human soul is in

した言方で:「その宗教が分かればその国民性が分かる」³⁰⁾、と。つまり、当時の新しい宗教観を表現するアニミズムの学説とその比較方法論を信奉していたのだ。

デ・グロートの主な弟子はデ・フィッセルだった。彼は元々ライデンで古典語を勉強して、1900年に25歳の年齢でその博士論文の口頭弁護を行なった。研究の対象は「人間の形をしないギリシア人の神々」³¹⁾だった。序文で上記の文化人類学者の影響を受けたことを記した上、「現代に存在する野蛮民族の迷信は資料が示すごとく古代のギリシア人の間にも通用した」と、その方法論の主旨をまとめる。デ・フィッセル自身のモットは「比較より光を得」(*E comparando lux*)であって、比較的なアプローチは「古代の迷信の源流と性格を研究するにはもっともよい方法である」と言っている。アニミズムの点でもデ・グロートと意見が一致した。

学生時代にはデ・フィッセルがデ・グロートと関わりはなかったらしい。二人を合わせたのは多分、当時の民族学博物館の館長のスメルツ (J. D. E. Schmeltz, 1839-1909) だったろう。博士論文の序文で、「よく民族学博物館を訪れたが、その館長を務める勝れたお方が、いかにも懇意的に、その珍しい宝とこのこと(即ち、他民族の宗教と信仰。WJB)に関する蔵書を示してくださった」と、名前こそ出さずに書くが、この館長はスメルツであるはずだ。この数年間の段取りが示唆的だ。1896年にはホフマンの弟子のセリュリエが館長を辞めて、ライデンを去りバタビアに行ってしまった。1897年にスメルツが後を継いで館長になる。1899年に新館長が博物館所蔵の「日本美術」の大きい展示会を催して³²⁾、自分は日本の専門家ではないのに、改めて博物館の日本のコレクションの重要性を悟っただろう。1900年に前から付き合っていたデ・フィッセルが博士号をとる。1901年にこの博士論文の積極的な書評がスメルツの創立して編集する民族学雑誌³³⁾に表われる。1902年にデ・フィッセルがデ・グロートに中国語を習いはじめる。狙いはやはり、セリュリエの退職でライデンにいなくなった日本研究家を育てることだった。推測だがスメルツとデ・グロートの民族学的関心が一致して、しかも、デ・グロート

China the original form of all beings of a higher order. Its worship is therefore the basis of all religion in that country.”

30) “Whoever is acquainted with its religion, knows the people.” (*Religious System*, Vol. I, Intr., p. x)

31) M. W. de Visser, *De Graecorum diis non referentibus speciem humanam*, Leiden, 1900 (「人間の相を呈しないギリシア人の神々について」)。ドイツ語訳: *Die nicht-menschengestaltigen Götter der Griechen*, Leiden, 1903.

32) 目録が残った: Rijks Ethnographisch Museum, *Tentoonstelling van Japansche kunst: gids voor den bezoeker*, bew. door J. D. E. Schmeltz, Haarlem: Kleinmann, 1899; 12+70ページ。Van Gulik, 前掲論文, p. 389を参照。

33) 本当の国際雑誌で、英仏独の諸国語の論文を載せ、*Archives internationales d'ethnographie*とも *Internationales Archiv für Ethnographie*とも *International archives of ethnography*とも知られている。1888年から1958まで、ライデンで発行された。

はちょうどその頃に博物館がライデンにから移転されないように手を回していたので、付き合っていたことは確実だ。デ・フィッセルを説得してデ・グロートに紹介したのはスメルツとしか思えない。

デ・グロートは日本語ができた形跡はない。だから、デ・フィッセルが2年間デ・グロートに師事してから日本語通訳官の見習いとして外務省から東京のオランダ公使館に派遣される運びとなる。1904年から1909年まで東京で暮らして帰国後、デ・グロートのもとでの研究を続けながら博物館で日本部の学芸員に就任する。1917年に教授に任命され、就任講義の題名は「中国とインドが日本の言語と文学に及ぼした影響に付いて」³⁴⁾ だった。教授としては日本語を教え、1919年より講師として彼に付けられたドイフェンダック (J. J. L. Duyvendak, 1889-1954) が中国語を教えた。ドイフェンダックは1910年よりライデンで中国語を勉強してから、デ・フィッセルと同じように、1912から1918年まで北京のオランダ公使館で見習い通訳官として勤めて中国語を覚えた経歴だった。

対象となる国こそ違っていたがデ・フィッセルの研究プログラムはよくデ・グロートのそれに似ていた。関心は日本の宗教に向いており、代表作は『日本の古代仏教』³⁵⁾ である。この外に、幅広く論文を書いたが、その中に日本に行なったフィールドワークで民間宗教について集めたデータに依るものが多いから、これらの論文のいくつかがまだ利用されている。民間宗教関係の論文は例えば、「日本の民俗における狐と狸」³⁶⁾ (1909)、「中国と日本における龍」³⁷⁾ (1913)、「日本における神道と道教」(1930) であり、仏教関係のものとして「中国と日本における羅漢」³⁸⁾ (1919, 1923)、「中国と日本における虚空蔵菩薩」(1931)、「中国と日本における地蔵菩薩」(1915)、「懺悔の儀式」(1926) などを取りあげることができる。評価すべきことはフィールドワークのデータを使うこと、昔の文献を使って遡ること、そして、日本のことを必ず中国のことと結びつけて調査することだ。この点においては、彼がまぎれもなくデ・グロートとホフマンの伝統に立っていた。ドイフェンダックがデ・フィッセルの死亡記事の一つに、この方法を批判して、現代と古代が全然違う、同じ名前を持っていても今のものと昔のものはそう簡単には比較できないということを指摘するが、³⁹⁾ この批判は妥当とは思えない。同

34) *De invloed van China en Indië op de Japansche taal en literatuur*, Leiden, 1917.

35) M. W. de Visser, *Ancient Buddhism in Japan: sutras and ceremonies in use in the seventh and eighth centuries A.D. and their history in later times*, 2 vols, Paris: Paul Geunther, 1928-1935; Leiden: Brill, 1935.

36) *The fox and the badger in Japanese folklore*, Transactions of the Asiatic Society of Japan, 1st series, Vol. 36, 3, Yokohama, 1909 (159 pp.).

37) *The Dragon in China and Japan*, Amsterdam, 1913; rpt Wiesbaden, 1969.

38) 1919年のはオランダ語で書かれた36ページの論文で、1923年のは *The Arhats in China and Japan* (Berlin, 1923) と、英文で240ページの単行本だ。

39) J. J. L. Duyvendak, "Levensbericht van Prof. Dr. M. W. de Visser," *Levensberichten van de Maatschappij der Nederlandse Letterkunde, 1930-1931*, Leiden: Brill, 1931, 抜け刷り, p. 4. Cf. Blussé, "Hewers of Wood," pp. 348-349.

じだとは誰でも思っていないだろうが、同じ系統に属することは確かだ。今の仏教徒と奈良時代の仏教は違うし、今の儀式は千三百年前の同じ名前を持った儀式とは当然違うだろうが、それでも、今の儀式を解明するには昔の文献も引き合いに出す必要があることは否定できないだろう。

学術論文の外に、日本のことに付いて啓蒙的な本も執筆した。一例は『現代の日本と昔の日本』(1913)⁴⁰⁾だ。ドイフェンダックが死亡記事の中でデ・フィッセルを世情に疎い学者と描写するがこの本を見るとデ・フィッセルが日本に在る間に、政治上、経済上の出来事をちゃんと観察していたことが分かる。そして、帰国後も新聞を読み続けたことが分かる。例えば、自分が目撃したポーツマス条約の反対デモのことを話し、大反逆事件に付いてかなり皮肉っぽいコメントをし、そして、日本の労働条件の悪いことを批難して日本でいずれ社会主義が勝つだろうということをさえ言い切ってしまう：「日本のように、税金が高くて給料がとうてい低すぎる国では土地があまりにも肥えているので、どんなに圧迫されながらも社会主義はだんだんと茂ってくるに決まっている」、と。

彼の学生のなかにピールソン (J. L. Pierson, 1893-1979)、ファン・プラーグ (S. van Praag, 1888-1958) とクリーゲル (C. C. Krieger, 1884-1970) が挙げられる。ピールソンは日本語言語史に関心を持っていたが、『万葉集』の研究で有名になった。『万葉集』の研究を始める目的は、日本語の語学史の資料として利用することができるように『万葉集』の語彙を分析することだったが、結果として、1929年に第一巻の翻訳を博士論文として認めてもらってから亡くなるまでに全二十巻を、万葉仮名でのテキスト>ローマ字での書き直し>諸本の異同>英訳>注釈というふうに翻訳することに成功した。⁴¹⁾ 1930年から1933年までユトレヒト大学で日本学の教授を務めたが、学生との喧嘩のために辞職した。

ファン・プラーグは近松門左衛門の浄瑠璃をオランダ語に翻訳して、ついでに浄瑠璃の唯一正しい訳語を作った：「劇的な物語 - dramatic stories」⁴²⁾。クリーゲルは民族学博物館の日本部の学芸委員を務めながら、1935年より、初めは講師として、1948年から1955年までは教授としてユトレヒト大学でピールソンの跡を継いで、日本語を教えていた。就任講義の題名は「禅とそれが日本の精神に及ぼした影響」⁴³⁾と云って、先生のデ・フィッセルに近かったことを示すものだ。

ドイフェンダックが1919年に講師に就任する時の講義の題名は「中国の戦争の神々」で、まだ幾分かデ・グロートの問題意識を匂わせるが、上述したとおり、彼はその後、このアプロー

40) *Van oud en nieuw Japan. Vier lezingen gehouden voor de Nederlands-Indische Bestuursacademie*, Leiden: E.J. Brill, 1913.

41) ピールソンのことは、拙論、「上代文学」、『上代文学』88 (2002), pp. 22-37を参照。

42) Monzaemon Tjikamats, *Dramatische verhalen; uit het Japansch vert. door Siegfried van Praag*, Santpoort, 1927 (57+428pp.; 16 ill.).

43) C. C. Krieger, *Het Zen-Buddhisme en zijn invloed op de geest van Japan*, Leiden: Brill, 1948.

チに対して批判的になった。1930年、教授に任命された時の就任講義は「歴史と儒教」で、デ・グロートの大嫌いな儒教を取りあげて宗教学と民族学からの分かれを遂げたと言えよう。実は講師に任命されたときに、まだ学位も資格もなかった。講師だったからまだ大目で見られたが、教授になるならやはり持っていなければならない。このために彼は1928年の3月に同日に修士課程と博士課程を卒業してから同年の12月に博士論文の口頭答弁を行なった。博士論文の題名は『商君書。法家の古典的文献』⁴⁴⁾で、専門的研究の重点は戦国時代の思想史だった。デ・フィッセルが亡くなる年、1930年に中国語の教授に任命される。デ・フィッセルの日本学の跡継ぎとして1931年にラーデル (J. Rahder, 1898-1988) が教授に任命された。もともと仏教学者だったが30年代にだんだんと比較言語学に転じた。1946年までライデンで続いてその後アメリカに行った。

結 論

上記の沿革史的な叙述を体系的に取り直すと、ライデンの東亜学を位置づけるために次の4点が重要だと思う：

(1) 言葉、とりわけ、言語研究の重要性。政府の目から見て、ライデンの東亜学者は蘭印支配に必要な通訳官を教育するために給料をもらっていた。通訳官の教育をライデンでしようか、中国かインドネシアでしようかということについて、議論があったが、特にコストを鑑みて予備教育をライデンで行い、その上、学生を中国に送ることは一番経済的で能率がいいと、植民地省が判断した⁴⁵⁾。しかし、ピールソンや後年のラーデルこそが例外で、他の教授たちは言語学者ではなかった。それでも素直に、中国語と日本語を教えて、その教え方について意見もあったし、教科書までも作ったりした。学生にも言葉がちゃんとできることが期待された。

一方、先生の間から見れば、言語教育は方便だった。あれで生計を立てたが、自分たちの目的は学問だった。研究するには、言うまでもなく中国語または日本語を読んだり話したりすることは必然的な条件だったがそれより一層重要視されたのは両国語の文献を集めて分析することだった。教授たちに言わせると、ライデンで施す教育の真の目的は中国語と日本語で書いてある文献を解読することが出来、そして、正しく解釈するためにその国の歴史や社会の一般知識を駆使することができる学生の育成にあった。会話はその国に行ってから習う者で、ライデンでは基礎を固める。

(2) 専攻は自由に選べた。何についての文献を研究の対象にしようとも、先生は大して気にしなかった。ただ、翻訳が正しいかどうか、文献の位置づけが正しいかどうか、ということだ

44) J. J. L. Duyvendak, *The Book of Lord Shang. A classic of the Chinese school of law, transl. from the Chinese with introd. and notes by —*, Probsthain's oriental series 17, London : Arthur Probsthain, 1928.

45) Blussé, "Hewers of wood," pp. 326-329, 337-339を参照。

けが問われた。この態度がかもした議論、即ち所謂 discipline 対 area studies の議論は、筆者が学生であった頃に行われたし、多分、それ以前にも行われただろう。その後も尾を引いて、今年（2008年）の文学部のリストラに際してまた台頭した。筆者に言わせると、くだらない議論だが、そう言えば叱られるかもしれないので自分の立場を数言で説明しておこう。ヨーロッパ人として中国または日本を研究しようと思えば、予備知識は全然ない。だから、まず、アイウエオから始まって言葉を覚えなければならない。しかし、言葉は真空の中で喋られているわけではないから、その国の歴史、社会、文化なども常識程度には覚えていなければならない。その上、自分の専門分野を決めてその調査を始めなければならないから、これだけでも結構忙しい。この外に比較文学の理論と方法とか、政治学方法論とかいう授業に出る暇はない。無理に暇を作って出れば、これは普遍的に応用できる理論と方法ではなく、本当は欧米の文学や政治を幾分か抽象化して、論じているまでのものだ、早くも気がつく。完全な無駄ではないが、二次的なものに相違ない。研究が discipline に基づいていなければ学問じゃないと時々言われるが、それはおおかた建前論と言えよう。しかし、結論として、予備知識の全くない文明を勉強するのなら、area studies 的なアプローチが適切だと言え、議論はいきなり能率論から道徳論に一転してしまう。というのは、今の世の中で area studies と言うと、人はホフマン以来模索しながらライデンで開発してきたようなカリキュラムとアプローチを想像するのではなく、第二次世界大戦後、アメリカでペンタゴン主催に設立された教育・研究課程を思う。それはアメリカ帝国主義のお先棒を担いだ御用学問だったので、「area studies に賛成だ」、と言うと誤解されて眉を顰められる始末だ。だから、くだらない。

(3) ライデンの東亜学は民族学博物館と密接な関係に生まれ育った。一代のシーボルトとホフマンは博物館の全身であるコレクションそのものを管理していたと言えよう⁴⁶⁾。デ・グロートも館長のセリュリエとは仲が悪いものの、収集した神像などを博物館に寄付したり売ったりしたし、その目録を作製した。デ・フィッセルは学生の頃、博物館のコレクションに触発されただけでなく、教授になるまでに8年間学芸員を務めた。後にもこんなふうな人事移動がよく演じられた。このコレクションはライデンの東亜学の強みの一つで、ずっと大事にされてきた。筆者の学生の頃に、日本学の洋書はほとんどなかった。どこにあるかと聞いたら、博物館の閲覧室に行くように言われて、行ってみれば外を回っていかなければならなかったものの、日本・中国の講座がある同じ建物（旧大学病院）の中にあった。ドイフェンダックの代から、中国学科と博物館の絆が緩めたが、日本学科の場合には関係が相変わらず強かった。

(4) 上述した事柄（第2項参照）にもかかわらず、自分の研究を普遍的な「学科」に位置付けて共通な方法論でもって進めた先生がいなかったわけではない。著しい例はデ・グロートとデ・フィッセルの二人である。その discipline は民族学兼宗教学であったことは偶然ではなか

46) 民族学博物館の成立過程の研究として、Effert, *Volkenkundig Verzamelen* が詳しい。外に Van Gulik の前掲論文も参照。

った。他の文化に対して一番柔軟で、一番相手の生活様式とその価値体系を理解しようとするのは文化人類学だった。一方、当時の人類学の主張が中国または日本に应用できるように見えたので、彼らが特に宗教を研究テーマにしたということも分かる。一切の宗教はアニミズムから発生するとか、その宗教でその国民性が分かる、とかいった題目はヨーロッパの優越性を保ちながらも他文化、他民族の位置付けを可能にして理解への門戸を開けるものだった。しかも、同時にライデンで行われた、デ・グロートが一時担当したインドネシア研究の分野では、文化人類学が盛んに行われていたので、それに触発され、影響されることも当然だった。

ライデンの東亜学は日本への関心から生まれて、植民地支配の必要性で育ったが、教授の歴代の就任講義で判かるように、20世紀に入るとその存在理由がもう問われていなかった。相変わらずその卒業生の多くが総督府に就職するのであったが、ライデンで受けた教育はその仕事の予備的教育ではなく、学者を育てる教育だった。先生も学生が始めから学問を志していた。特徴は文献本位で総合的なアプローチで、文言、漢文、文語体の古典語の学習が重要視されていた。教育では、言語、歴史、社会、文化に十分注意が払われた。そして、展望はデ・フィッセルの就任講義のごとく、インド、中国、日本という、広いものだった。この学風は実は大陸の他の国々のそれによく似ていた、いや、ある意味では他の国々のそれを作った。シーボルトとホフマンの偶然な出会い、そして、ホフマンが日本語を習うのに先に中国語を覚えなければならなかった、偶然から始まった。